
初めての。

つあぎ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

初めての。

【Nコード】

N3771D

【作者名】

つあぎ

【あらすじ】

「強化人間」の人体実験をしようとする科学者に、嬉しいニュースと悲しいニュースが。近未来の地下都市で繰り広げられる、姉妹のお話です。

初めての。

地下都市「アーク」。「箱舟」の名を冠する、欺瞞に満ちた世界である。

そこを治める、唯一の統治機構である「政府」は、己の手足となつて働くものを求めていた。

「政府」の統治が始まってもう数え切れないほどの年月が過ぎ去っている。不満を抱くものの殆どは、テロリストとして各地で暴れまわっていた。

テロリスト達との抗争は、年を経るごとに激化の一途を辿っている。今までは、治安維持を担当する「軍警察」内の特殊部隊がテロリストに対抗していたのだが、近年は損害が激化していることから、政府はもつと強力な打撃力を欲していた。

人のようで、人でないモノ。
そして、こちらの手足となる、優秀な駒。
それを、欲していた。

「アーク」第三階層 「イグザクトリー製薬」研究所

静まり返った研究室に、PHSの呼び出し音が鳴った。持ち主の女が、恥ずかしそうに電話を取る。

『パメラさんですか？ 受付ですが……』
「どうしたんですか？」

持ち主 パメラが、こそこそと廊下に出ながら電話に応える。すると、廊下で一服している上司と目が合った。パメラはばつが悪そ

初めての。

うに少しお辞儀をする。

『面会希望の方が来られています。ドーラ・フォークトさん。お姉さんとのことですが……』

姉が来ている？ 何かあったのだろうか。

「あ、確かに姉です。わかりました、今行きます」

パメラは電話を切り、一服している上司のほうを向いた。パメラからの視線に気付いた上司が、煙草を灰皿にねじりこむ。

「……姉が来てるそうです。少し、留守にしていますか？」

「好きにしる。どうせ行き詰ってたんだ。まあ、連絡あったらピッチの方に電話するわ」

「すみません」

パメラは研究室の自分の机に戻り、引き出しの鍵を開けて財布を取り出した。白衣を椅子にかけ、受付へと足を進める。

姉は別の区画で風俗嬢をやっている。会つのは結構久しぶりだ。

「姉さん〜？」

エントランスに着いたパメラは、姉の姿を確認すべく周りを見渡す。姉は喫煙ルームの中で煙草を吸っていた。

「や、パメラちゃん。お久しぶり〜」

パメラの姿を確認できたのか、姉　ドーラは煙草の火を消して、つかつかと喫煙ルームから出てくる。相変わらず、派手な服装だ。

「お久しぶり、姉さん。元気だった？」

「うん、元気元気。パメラちゃんも元気そうで何よりね」

「それで、何か変わったことでもあったの？」

ドーラは笑ってかぶりを振った。

「うっん、たまたま近くを通りかかったから。迷惑だった？」

「そう、ならいいんだけど」

「ごめんね、仕事中なのに」

今度はパメラがかぶりを振る。

「うっん、丁度行き詰ってた頃だしね。お昼食べた？」

「まだ」

初めての。

「じゃ、食べに行こっか？ たまにはあたしが奢ってあげるから」
「ふふ、偉くなったものね」

ドーラが苦笑した。二人はそのまま、自動ドアをくぐって路地へと出る。

「何にする？」

「おまかせ」

「そーゆーのが一番困るんだよなあ……」

パメラは頭をかきながら、行きつけの蕎麦屋に向かう。彼女らは二人とも美人だ。結構街行く人達の視線を集めている。

「パメラちゃん、彼氏とはうまくいつてるの？」

「へ？ ま、まーね」

とは答えたものの、パメラに彼氏はいない。数ヶ月前に見栄でついた嘘を突き通していた。

「ふーん。その割には、こないだチエスター君達と合コンしてたそうじゃない？」

「う……。痛いトコを……。別に、気になる人はいなかったけどさ。つてか、それ以前に彼氏いるし」

チエスターとは、軍警察の特殊部隊に勤務する男である。かなりの美男子として通っていた。

「てかなんで姉さんがチエスターのこと知ってんのよ。さてはお客様さんで？」

「ヒ・ミ・ツ」

何週間か前に、研究所の女子職員何人かを連れて、チエスター達と合コンをしたのは事実である。だが、パメラは数合わせとして出ただけなのだ。しかし、ベルンハルトとかいう男とは妙に話が合った。パメラには結構オタクな部分があり、漫画やアニメの話などで二人で盛り上がったのだった。

最も、周囲はドン引き状態だったのであるが。

普段よく行く、蕎麦屋に着いた。小綺麗な店ではないが、味のほうは保証つきだ。まだ12時前なので、客の入りも少ない。

初めての。

「いらつしゃいませっ！」

店員の元気な声が響く。二人はテーブル席につき、メニューを広げた。店員が水の入ったコップとおしぼりを持ってくる。

「……………決まった？」

「うん。店員さん呼ぶよ？」

ドーラが声を張り上げた。店員が小走りで注文を取りに来る。

「お決まりでしょうか？」

「あたしは天ぷらそば」

「えっと、月見そば」

「お箸とフォーク、どちらになさいます？」

「あたしはお箸で。姉さんは？」

「…………フォークで」

「かしこまりました！ 天ぷらそばと、わかめそばですね。少々お待ちください！」

店員がエプロンのポケットから、割り箸とプラスチック製のフォークを一つずつ取り出して、テーブルに置く。そのまま、厨房に向かって注文を大声で叫んだ。元気のいい店員だ。印象は悪くない。

「あれ？ 姉さん、お箸使えないんだ」

パメラの小馬鹿にしたような言葉に、ドーラは口に含んでいた水を噴出しそうになる。パメラも使えるようになったのは最近のことなのだが。

「お、大きなお世話」

「あたしは完璧だよ？ よかったら教えようか？」

パメラが少し楽しそうに喋った。

「…………それで、行き詰ってたって？」

「…………新薬の研究。なかなか実験できなくて
嘘である。」

パメラ達のチームに与えられた仕事は、政府から依頼された「強化人間」の開発。神経系統や内蔵などを人工物を置き換え、身体能力の飛躍的な上昇を狙ったものである。

初めての。

机上研究は完璧。動物実験も成功。あとは人体実験だけである。しかし、その被験体がなかなか見つからなかった。

『いっそのこと、誘拐でもしようか？』

プロジェクトのリーダー、ジェイソンが数日前に言った言葉だ。冗談半分だろうが、そんな冗談が飛び出るぐらい、彼女達は切羽詰っていた。この実験が始まってから随分と長いことが経過している。技術実証が近いうちにできなければ、彼女達のチームは解散。最悪、首が飛ぶかもしれない。また、今回のプロジェクトは最高機密になる。首どころか、生命の保証も無い。

それぐらい、今回のプロジェクトに本社は社運をかけていた。

「ま、そりゃそうよね。効果も何も立証できてない薬の実験に、誰が名乗り出るっていうのかしら」

最悪、被験者はプロジェクトのメンバーから選ばれるかもしれない。ひよっとしたら、自分かも。

「ふーん、仕事の話はよくわかんないけどさ」

ドーラは少し水を飲む。店員がお盆を持ってやって来た。お盆の上には湯気を立てる器が二個、置いてある。

「お待たせしました！ 天ぷらそばと、月見そばになります！ ご注文は以上でお揃いでしょうか？」

店員がそばの入った器をテーブルに置いた。パメラは店員の問いに対して、頷きで返答する。

「ごゆっくりどうぞ！」

店員が会釈をして厨房のほうへ戻っていった。パメラは箸を割り、そばをすくい上げて息を吹きかける。

「パメラちゃん」

「ん？」

「お姉さんに任せときなさいね」

ドーラがそばをすすりながら、小さく、かつ力強く囁いた。

「い、いや、意味わかんないから」

嫌な予感がした。

初めての。

↳ 数日後・研究所

いつも姉は、自分のために身を引いてきた。

お菓子が一個だけ余った時。同じ男性を好きになった時。両親を不慮の事故で亡くし、学費の支払いが困難になった時。

いつも笑って身を引いた姉。

それだけに、先日の一言が、パメラの胸につかえていた。

「おはようございます」

いつものように研究室の皆に挨拶し、自分の机に座る。恒例の朝のミーティングはもうすぐだ。

「おはようさん。今日は良い知らせがある。被験者が見つかった」
ジェイソンが開口一番に、嬉しそうに喋る。

「本当ですか！？」

「これでやっと……準備急がないと！」

「うーん、テンション上がってきたね」

同僚は皆、嬉しそうだった。研究続行、そして、自分が実験の対象でなくなったことに対して。

「……あとパメラ、ちよいとコツチへ来い」

ジェイソンが部屋から出て行った。妙に声のトーンが低かった。

先ほどの声とは、明らかに違う。何だろう。……まさか。

いいや、そんなはずはない。パメラは必死に疑念を打ち消しつつ、廊下へと足を進めた。

「……どうしました？」

「悪いことは言わん。お前はこのプロジェクトから身を引け。後のことは俺が口聞いてやる」

初めての。

「なっ、何ですか急に!？」
なぜか、姉の言葉が去来した。ずっと胸につかえていた一言が。

『お姉さんに任せときなさいね』

嫌な予感がした。

違う、違う、絶対に違う。そんなはずはない。

「……今回志願してきた被験者は、お前の姉さんだよ」

嘘だと思いたかった。予想はしていたが、それでも。しばらく場を沈黙が包んだ。上司がやりきれなさそうに煙草に火を点ける。

「……………嘘」

「…………嘘じゃねえ。謝礼金は全部、パメラにやってくれとのコトだ。本人はお前から施術されることを望んでるが、どうなんだ？」

どうして。どうしてこんなにあたしに気を遣うの。パメラは俯きつつ、消え入りそうな声で呟いた。

「…………すみません、少し、考えさせてください…………」

「そうしろ。もしお前がこのプロジェクトから身を引かなかったら、被験者の希望通り、お前に施術させるからな」

ジェイソンの言葉もうわの空。パメラが力ない足取りで、バルコニーに出る。胸ポケットから折り畳みの携帯電話を取り出し、乱暴に開いた。そのままアドレス帳を開き、姉の携帯番号に電話する。

少しの呼び出し音の後、電話が取られた。

嘘であって欲しい。あたしを陥れるドッキリか何かであって欲しい。そうであればどれだけ楽か。

『パメラちゃん、話は聞いた?』

「…………聞いたわ。冗談でしょ?」

初めての。

『うつん、いたって本気』

絶対に聞きたくない返答だった。パメラは大きく息を吸い込む。

「……何考えてるのよッ！！！！ 何て聞いたかは知らないけど、これは人体実験なのよッ！！！！」

思いつきり吐いた。心の底から思っていることと一緒に。

「あたしがやってるのは新薬の開発なんかじゃない！！ あたしがやってるのは……」

『ジェイソンさんから聞いたわ。『強化人間』って奴でしょ？ 大丈夫、他の人には何も言つて無いから』

「なら、どうして……！！！！」

『パメラちゃん、よく聞いて。あたしがこの役をやらなかったら、絶対に誰かがこの役をやることになるの。ひよっとしたらパメラちゃんがやることになるのかもしれない』

「それぐらい覚悟してたッ！！ 姉さんはいつもそうよ！！ あたしの気持も考えないで、自分一人でどんどん突っ走って！！」

『前にも言わなかったかな？ お姉さんは、パメラちゃんのためなら死んでもいいって』

「そんなの違うッ！！ 絶対違うッ！！！！」

『パメラちゃん、あたしの決心は変わらない。だから』

「あたしのことも、考えてよお……ッ！ お願い、今ならまだ間に合うから……」

自分の声に、涙が混ざるのが解った。電話越しにだが、少し哀れむかのような声が聞こえる。

『ずっとお姉さんはパメラちゃんの言うこと聞いてきた。だから、今回だけは、お姉さんの言うこと聞いてね？』

「……できないよお。あたしにはできないよおッ！！！！」

『ねえパメラちゃん、人間じゃなくなってしまうのなら、せめて、貴女の手で、お願い』

それだけ言つて、ドーラが電話を切った。パメラは携帯を地面に落とし、バルコニーの手摺にもたれかかる。

初めての。

おそらく、もう取り消しなんてのはきかないだろう。かなり切羽詰っている状況だ。誰もそんなことは許さない。だからジェイソンも、自分のほうを引かせようとしたんだろう。

そして、自分が辞退すれば、姉の施術をするのは。

そうなるよりは、姉の希望通りに自分が施術するのが一番良いのだろう。だが、姉の体を切れるのか。姉を人で無くすことができるのだろうか。

「パメラ、腹は決まったか？」

ジェイソンが煙草を吸いながら、バルコニーに出てくる。

「……煙草はやめてくれませんか？」

「すまん」

ジェイソンが大人しく煙草の火を消した。普段はなんだかんだ言っつてずっと吸いつぱなしなのに。こちらに気を遣っているんだろう。「姉さんは言いました。『人間じゃなくなってしまふのなら、貴女の手でお願い』って」

「……そうか。よっぽど、お前のことを信頼してるんだろうな」

上司が手摺にもたれかかりながら、外を眺める。手摺の外は、この辺りでは珍しい緑化区域だ。

「お前はよくやってくれた。知識も技術も、多分俺達の中じゃ一番目だろう」

「一番は？」

「俺に決まってるだろうが」

上司が軽く笑った。ちよっと不愉快だ。勝つてるとは思わないが、負けてるとも思わない。

「俺の本音はな、お前には残っていて欲しい。お前がいるといたいとは、全然違うからな」

「……大丈夫です。決心しました。あたしは……」

初めての。

自分にはできないかもしれない。……いや、できる。姉の体を切り刻み、訳のわからないものを埋め込み、姉を人でなくすことぐらい。

「……このプロジェクトに残ります。姉の手術……やらせてください」

「いいのか？ 後悔しないな？」

「……はい」

上司が笑った。そして、再び煙草に火を点ける。

「全く、難儀な仕事だねえ……。つくづくそう思うよ」

「そんなこと思う前に、煙草を消してください」

第三階層 軍警察支部

携帯電話の呼び出し音が鳴った。某アニメのオープニングテーマだ。

「どーした、ベルン。妹さんか？」

大柄な男が、携帯の持ち主の冴えない男。ベルンハルトに問いかける。

「いや、マイシスターは別の曲だ。こりゃ誰からだ？」

ベルンハルトが携帯の画面に出ている発信者を見る。

「……パメラさんっ!？」

予期せぬ発信者に、思わずベルンハルトは声をあげた。周りからの視線が彼に集中する。彼女とは以前に人数合わせで出た合コンで

初めての。

話が合つて、それ以来メル友のような形になっていたのだった。
とりあえずベルンハルトは電話に出ることにした。

「はい、もしもし」

『……明日休み?』

「はあ。休みスけど?」

『用事は?』

「ない」

『じゃあ20番地のアパートに』正装で『9時に来るように。間違つてもいつもの趣味悪い服でなんか来ないで』

「ちょ!?! マジでか!?!」

『マジ。交通費はこつちで持つわ。お昼も奢るから。宜しく』

パメラが一方的に電話を切った。信じられない、といった顔をしているベルンハルトに同僚が一斉に詰め寄った。

「詳しく」

「……20番地に正装で9時に来いつて。交通費とお昼支給」

「ちょ!?! それつて逆援助っばい!」

同僚の人相の悪い男が驚愕する。

「パメラさんだろ? こないだの合コンに来てた、あの美人さん?」

「おー」

「チツ、死ねば良いのに」

同じく同僚の、大柄な男が毒づいた。

「でもお前童貞だろ? どーすんのよ」

前回の合コンの主催者、チェスターが茶化す。

「どどど童貞ちゃうわ!!! それに俺は」

「……幼女一筋……だろ?」

三人の声がハモった。見事なコンビネーションだ。

「まあ俺が今までもてなかつたほうがおかしいのよ。相手が幼女じゃないのが、至極残念だがな!!! うははははは!」

ベルンハルトが高笑いする。その様子を聞いていた、部屋の端の方で雑誌を読んでいた女が面倒そうに呟いた。

初めての。

「アナタ達、テンション高すぎて本当につざいですわー」

↳翌日・第三階層 20番地

ベルンハルトはスーツに身を包んで、アパートの前に立っていた。正直、あまり似合っていない。

「や、来たね。って、ちゃんとスーツ着てるし。うんうん」

パメラが来た。パメラは普通の私服である。

「で、今日の用事なんだけど……」

「あいあい」

「簡単に言うわ。今日一日だけ彼氏になってくれる？」

「はいい!？」

ベルンハルトは公道だというのに酷く驚いた。啞然とした表情のベルンハルトを放って、パメラは言葉を続ける。

「姉さんに『彼氏見せて』って言われたのよ。彼氏いないのに『いる』って言い張ってたから、仕方なく、ね」

「そんなしょうもないことで嘘つくなよ……」

ベルンハルトが苦笑した。パメラも恥ずかしそうに笑う。

「アンタを選んだのは、アンタがロリコンだったこと知ってるから! 一番後腐れないと思ったのよ! べ、別に特別な感情なんて、抱いてないんだからね!」

「はいはい、わかってる。ツンデレ乙」

そんな会話を交わした後、パメラの先導で、ベルンハルトがアパートの一室に入っていく。

「姉さん、彼氏連れてきたよ」

「あ、はいはい。どうぞ、あがってあがって」

初めての。

パメラとベルンハルトが、ドーラの部屋に入る。結構シンプルな部屋だが、置いてある家具なんかは一級品だ。やはり、結構稼いでいたのだろう。

「紹介するわ。彼氏のベルンハルト」

「はじめまして、ベルンハルト」シユヴァルベです」

ベルンハルトが会釈をした。ドーラが彼を舐めるように見る。

なるほど、この姉にしてこの妹ありか。美人な姉妹だ。

ベルンハルトは思わず納得した。

「どうも、パメラの姉のドーラです。安心しました」

ドーラは何か納得したように首を縦に振り、ベルンハルトに会釈をした。

「まあ立ち話もなんですし、座ってください」

パメラとベルンハルトが並んで座る。心なしか、ベルンハルトは緊張していた。演技とはいえ、こういう席は緊張する。

「馴れ初めから、聞かせてもらえますか？」

「ファミリーストラン

「ふいふいふいふい、疲れたあふいふい」

ベルンハルトはファミリーストランの店内でくつろいでいた。

ネクタイは如何せん慣れない。鬱陶しそくにネクタイを解く。

「お疲れ。……今日はありがとね」

パメラがドリンクバーのソフトドリンクを二個持ってくる。

「しっかしまあ、姉さん美人だったねえ。結構もてたんじゃないの？」

「へ？ あ、うん、結構ね」

初めての。

部屋を出てから、パメラの様子はどこか変だった。妙にうわの空というか、なんとというか。

「妙に元気ないな。どうしたん？」

「え？ い、いや、別になんともない」

パメラが慌てて否定する。その態度は余計に怪しかった。

しばらくして、ウエイトレスが料理を運んでくる。決して美味くはないのだが、不味くもない。コストパフォーマンスは良かった。

二人とも喋らず、黙々と料理を口にする。気まずい。ベルンハルトは何か会話のネタを探していた。

「ねえ、ベルンハルトには妹さんいるんでしょう？ 妹さんのためになら、命を捨てられる？」

「？ どうしたんだよ、急に」

「いいから、答えて」

「そうだな……」

ベルンハルトは料理を口に運ぶ手を止めて考える。彼にとって妹はただ一人の家族であり、危険だが収入の高い軍警察の特殊部隊に志願したのも、彼女のためだった。

「捨てられるだろうな。妹の優先順位はかなり高いし、何よりも俺にとつてただ一人の家族だしな」

「そう。やっぱりそう……」

思えば、ベルンハルトとパメラの境遇は、立場こそ違えど非常に似ている。二人とも家族は兄弟一人のみで、年上の方が年下のために高収入な仕事に就いている。

「ホント、どうしたんだよ、急に」

「……今度、姉さんは新薬の実験体になるの。あたしの作った」
流石に強化人間とは言えない。

「動物実験は成功してる。でも、人間に使って大丈夫なのか、そこは全然わからない」

「……姉さんは自分から志願したのか？」

「うん。最初から知ってたら、あたしは絶対に反対してた」

初めての。

パメラの声には力が無い。

「怖い。凄く……凄く怖い。あたしが姉さんを殺すかもしれない。あたしのために危険な実験体を買って出た姉さんを、殺しちゃうのかもしれない……」

パメラが俯く。眼から涙が零れ落ちたのが見えた。

「そんな姉さんに、あたしは嘘をついた……。ダメよね、ホント……。ホントに、ダメだよね……」

「……ダメじゃない」

ベルンハルトはフォークを置き、テーブルの向かいに座っているパメラの頭を撫でた。こういう役は似合わないが、やらざるを得ないだろう。

「さっき、姉さん言っただろ？ 安心した、って。あの時俺は言葉の意味がよく解らんかったけど、今はよく解る」

自分がいなくても、パメラはやっていける。ドーラはそう思ったのだろう。勘違いというか、嘘だけど、それがドーラにとっていいことなら、それでいいと思う。

「嘘も方便だ。悩むな。それに、パメラの実験は、まだ失敗するって決まった訳じゃないだろ？」

「……うん」

「なら、成功するよ。パメラが作った薬なんだから？ 大丈夫だって」

ベルンハルトはパメラを励ますかのように必死に声を投げかける。

「大丈夫だから、な？ さ、食べよう食べよう！ 冷めるって！」

「…………がと」

「ん？」

「ありがと」

パメラは紙ナプキンで涙を拭き、ベルンハルトに向かって、少しだけはにかんだ。

初めての。

「もう準備は出来てる」

上司はいつものように煙草をふかしていた。ただ、やはり緊張するのだろう。何せ人間に対して、初めて行う強化手術なのだから。「本当にいいんだな。後戻りはできんぞ」

「……はい。覚悟はできました」

パメラは小さく、かつ力強く返答し、更衣室へ歩く。

自分がやるんだ。必ず、必ず成功する。最高の手術にしてみせる。そして、姉を絶対に死なせない。いつものようとはいかなくても、それでも笑えて、泣けて、怒れる、親しんだ姉のままにしてみせる。そうは言うが、やはり手が少し震えていた。怖い。失敗が怖い。「落ち着け、落ち着くのよ、パメラ……」
パメラは軽く深呼吸をした後、白衣を脱いだ。

初めての。

手術台に横たわった姉の身体。綺麗なものだ。売れっ子だったというのも解る。それを、妹である自分自身が、切り刻む。

「姉さん、麻酔かけるよ……？」

「ええ。思い切ってやっちゃって。ばっさばっさ切り刻んでくれていいからさ。ばっさばっさ！」

「……冗談になってないからさ……」
全身麻酔の準備をする。

「ねえ、お姉さんは失敗したとしても、アナタのことを恨まないからね」

「……うん」

「ベルンハルトさんと、仲良く」

「……うん」

「仕事には精一杯取り組んで」

「……うん」

「失敗して、お姉さんがいなくなるようなことがあっても、お姉さんのこと、忘れないでね」

「……うん」

「パメラちゃん、もう一回、顔をよく見せて」

「うん」

パメラは涙を堪えつつ、ドーラの顔をよく見た。マスク越しのため、ドーラからは目元しか見えないだろうが、そんな関係ない。

「麻酔、お願い」

〈軍警察

「……パメラの奴、大丈夫かな……」

「何かあったみたいですねー、ようやく春が来ましたの？」

「いいや、コッチの話」

ベルンハルトは、研究所の方角を見上げて呟いた。

「大丈夫だから、な……」

〈研究所・バルコニー

初めての。

パメラは着替えもしないまま、バルコニーに出ていた。
手ごたえはあった。姉は間違いなく大丈夫なはずだ。
「お疲れさん」

今日は助手を務めてもらっていた、ジェイソンが出てきた。彼も
着替えていない。

「……煙草一本貰えますか？」

「いいけどな。吸えるのか？」

パメラは上司から煙草を一本貰い、煙を吸い込んだ。思いつきり
むせる。無理も無い。普段吸っていないのだ。

「やっぱりな」

ジェイソンが少し笑う。

「姉さんは……大丈夫だと思いますか？」

パメラの問いに、ジェイソンはしばらく黙った。

「……さあな。ま、俺が見てた限りじゃ、大丈夫だろう」

「ですよね」

上司が紫煙を細く吐き出した。天井は相変わらずの曇り空。今の
パメラの心境を表しているかのようだ。

「……今日は早く上がらせてもらえますか？」

「ああ。許可する」

「ありがとうございます」

パメラはきびきびと更衣室へ足を進める。ロッカーの中から携帯
電話を取り出すと、着信を示す青ランプが点滅していた。携帯を開
いてみると、ベルンハルトから何件も着信が入っていた。

「……いつちよまえに心配しちゃってさ」

少し笑った後、力をなくしたかのようにパメラは崩れ落ちた。

初めての。

〈数年後

強化手術が施された人間の数は百人を越え、パメラの名前は売れに売れた。それと同時に、悪名も広まっている。自分の名誉のために姉を強化人間へと仕立て上げた冷血女と。言いたいことはあるが、反論するつもりはない。

そして、ドローラは

「姉さん、データ取りお願いね。できるだけ詳細希望」

「了解っ！ お姉さんに任せときなさい！！」

初めての。

(後書き)

読んでいただき、ありがとうございましたー！

以前書いたものに加筆したものです。

一部表現しきれっていない部分もありますが……若さといふことでw

初めての。

初めての。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3771d/>

初めての。

2008年11月7日07時53分発行